

## 「若者のゆくえ」

岩手県の中学生が自殺。教師との交換ノートには自殺の暗示。

今週、火曜日のニュースです。

教師はいじめに気付けたはずだ！なぜ、自殺の SOS に気付かなかったんだ。

世間の声です。

世間を騒がすいじめ自殺問題。このようなニュースはもはや珍しいものではありません。

「あなたは、『いじめ』に関わったことがありますか？」

本弁論の目的は、いじめ自殺という「絶望」を通して、「いじめ」問題へのとらえ方を再考することにあります。

「絶望」とは何でしょうか？

それは、誰とも関わり合いをもてていない。誰からも認められていない状況です。

「不登校」「自殺未遂」「精神障害」。そして、最悪な形としての「自殺」。

「僕のことに気付いてほしい。もっと、愛してほしい」

子ども達の声なき声は、時に社会によって無残にもかき消され、彼らを「絶望」へと追いざないます。

しかし、最初に言うておきます。いじめは悪ではありません。そして、なくなるものでもない。

いじめとは一体何でしょう？

その定義は非常に難しいです。単なる仲間内の「いじり」が、「いじめ」になってしまうことは多々あります。この前まで、「いじめられて」いたにもかかわらず、今では「いじめ」をしているなんてこともあります。

よーく、思い出してみてください。

過去にいじめられたと思っている方。本当にその時の自分は、周りに「いじめ」をされているとおもっていましたか？

仲間外れにされたり、パシリにされたり。それを、「いじめ」とおもっていましたか？

過去に「いじめ」をしていたと思う方。そのときの自分は「いじめ」をしていると自覚をもっていましたか？

逆に「いじめ」に関わったことがないと思っている方、本当にあなたのクラスに「いじめ」は存在しませんでしたか？

「いじめ」は烙印です。当時ではない、あとの自分が。本人ではない、他の誰かがそれを押しします。

いじめに実体はありません。しかし、いじめは存在するのです。

いじめはいつから存在するようになったのでしょうか？

昔から。確かにそうかもしれません。

ガキ大将が弱い者に対して、暴行を加える。クラス全員でひとりにおかしなあだ名をつけ、からかう。このようなことは、確かに昔から存在しました。

では、「いじめ自殺」はいつから存在したのでしょうか？

いじめに関する報道が過熱する現在。

その原因は、いじめが「死」といった「絶望」につながると考えられようになったからです。1995年。「いじめられたから、死ぬことにした。」という、遺書を残して中学生が自殺した事件以降、いじめの問題性を訴える報道が急増しました。そして現在、いじめの報道は30年前の10倍以上にもなっています。いじめは昔から存在するにも関わらずです。

日常生活の中、他人との関わりあいで、嫌なことや苦しいことは無数に存在します。

しかし、それらを私たちは社会問題として取り上げることにはしません。なぜなら、そんなこと普通に生きていたら当たり前のことだからです。

しかし、それらがまだ幼い子ども達の中で、絶対的に否定されるべき「絶望」とつながることで、周囲との「嫌なこと」は「いじめ」となり、それが自殺の原因だとされてしまうのです。そして、その瞬間。自殺や不登校そのものではなく、子ども達の関わり合いが害悪としての「いじめ」として、メディアによって報道され、世間を巻き込んだ社会問題となるのです。

いじめは子ども達の「絶望」により、我々の意識に「悪」として引きずり出されてくるのです。なら、私たちのやるべきことはなんなのでしょうか？

簡単です。「いじめによる絶望」をなくせばいいのです。これはなくなるものなのでしょうか？

「いじめ」は絶対なくなりません。

そして、「いじめ」そのものを正確にとらえることは殆ど不可能です。

しかし、その実態のつかめない、なのに、あり続ける亡霊のような存在を、私たちは恐れ、社会から取り除こうとします。

では、「いじめ自殺」はなくなるのでしょうか？

いいえ、断じてそのようなことはありません。いじめはなくならずとも、いじめ自殺はなくなるのです。

では、どうすればいいのか。

それは、「いじめ」が自殺の「動機」として機能しない社会を構築することにあります。

いじめが自殺を引き起こす。当たり前にも思えるこのことが、当たり前のものとして考えら

れるようになったのは実はごく最近です。1980年に大阪府で中学生が自殺をした事件がありました。しかし、当時の新聞やテレビの報道は今とは違うものでした。警察は本人の気の弱さが原因だったとし、親に至っては、うちの子がいじめなんかで自殺なんかしないと主張したのです。

そこに暴行や集団での嫌がらせが存在していたとわかっているにも関わらず、多くの関係者はいじめを自殺の原因としてとらえようとはしていませんでした。

実際当時は、子ども達自身も「いじめ」はわざわざ死ぬような問題とは考えていなかったのです。いじめのみでは、子ども達は自殺などしないと考えられていたのです。

もちろん当時、「いじめ自殺」などは存在しませんでした。

いじめは自殺へつながるもの、絶対的に悪なんだという認識は、当たり前ではないのです。海外を見ても、同じことに気がつきます。子ども達の関わりあいに対して、「いじめ問題」として、法律や学校単位での対策を行っている国は実は先進国の一部だけなのです。「いじめ」対策の法律に関しては、国家単位で制定しているのは日本だけです。

「いじめ自殺」はいじめをなくすのではなく、いじめが自殺の原因になる、いじめが絶望へとつながるという社会の認識を改めることにより、撲滅されるのです！

そんなただの言葉遊びだ！現にいじめそのものはちっともなくなっていないじゃないか。このように考える方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、「いじめをなくせ」というその主張こそが、意図せざる結果として「いじめは死に値する苦しみである。」という認識を増やし、また新たな「いじめ」を生むのです。

いじめが自殺を引き起こすというその認識が、普段のやり取りを「いじめ」にし、彼ら自身も自らの将来への選択肢に「死」を知らず知らずいれるようになるのです。

一般的な自殺では、自殺に関連する報道が増えれば増えるほど、同時期の自殺者数も増えるというジレンマが報告されています。人びとが本当に苦しいとき、「自殺」の理由を社会が提示してしまっているのです。

孤独な個人に対し、社会はやさしく微笑み、こういうのです。

「そんなに苦しいなら、死んでもいいよ。だって、いじめで死ぬことはふつうだから。」

なくならないいじめ。問題は社会全体のとらえ方。

では、私たち個人は何をすればいいのでしょうか？

目の前で苦しんでいる彼らに対して、私たちがやれること。

それは普段から孤独である彼らの話を聞き、存在を認めてあげること。

そして、子どもの社会の問題である「いじめ」を、子ども達で解決させてあげることです。

すごく簡単のように聞こえます。今でも十分やっているだろう！という声もあるでしょう。

ですが、それは本当でしょうか？

先日、ドッチボールがいじめの温床だ、学校でやらせるべきではないという声が教育問題と

して多く取り上げられました。しかし、SNS 上では、多くの子どもがそのやりすぎとも言える意見に違和感を得たことを報告しています。なぜ、このようなズレがおこったのでしょうか？

イジメは子ども達の問題です。無邪気な子どもが生む罪なき罪に対して、大人は時に手助けをしてあげなければなりません。しかし、あくまで子ども達の中で、子ども達の手で問題そのものは解決すべきです。大人が子どもの社会に対して、何が良くて何が悪い、どこからがいじめでどこまでがそうではないのかを決めつけることは断固としてあってはなりません。

私たちはついつい、未発達な彼らから問題を取り除こうとし、彼らの社会そのものを壊してはいませんか？

子どもを信頼し、子ども達の中で解決させる。子ども達に彼ら自身の問題を任せるには、私たちひとりとりが根本的に「いじめが絶望を招く悪である。」という認識を改める必要があるのです。

学校は子ども達の関わり合いの場です。

教師の役割とは、子どもから害悪を取り除くことではありません。彼らがうまく人と関わることを促し、調整することです。

「どうして、いじめを早期発見できなかったんだ！教師が怠惰だった」

死んだ子どもの親は言います。

なぜ、そこで親は被害者で、学校は加害者になるのでしょうか？

本人が苦しんでいるとき、親はどれほど彼の話聞いてあげたでしょうか？

どれほど、彼を認め、愛してあげたでしょうか？親だけでは、ありません。周りの友人もそうです。

最後の勇気を振り絞って行った最悪の決断の後、彼らは最大の友人となり最愛の息子となるのです。

川崎市での中学生死亡事件。

A 君は結果的に死亡したものの、彼は暴行を加えられるにも関わらず、いじめグループと関わることをやめませんでした。時には、彼らと犯罪も犯していました。

それは、逃げられなかったからでしょうか？

いいえ、彼は認めてもらいたかったんです。それが、たとえ暴力であったとしても、それは「彼」という存在への一つの承認だったのです。

いじめを悪だと、決めつけることなく、もう一度見つめなおしてください。

「いじめ」という亡霊は気付かないうちに、私たちを取り囲むのです。

最後に、もう一度質問します。

「あなたは、『いじめ』に関わったことがありますか？」